

2016年10月

CAPSULE

カプセル

ナガサキ・ユース代表団 活動の記録

特集

ナガサキから
世界を
見つめる



学長の目

ナガサキ・ユース代表団の周りには、時に温かく、時に厳しく活動を見守って下さる、父親のような人たちがいます。ユースの創設者でもある長崎大学の片峰学長もそのひとり。そんな片峰学長に、話を聞いてきました。

ユースの活躍「期待以上」

今年で創立から4年目を迎えるナガサキ・ユース代表団ですが、創立当初の私の期待をはるかに上回る成果をあげてくれています。戦後71年目を迎え、これからさらに、ユースを中心とした若い世代が益々その力を発揮し世界に貢献してくれることを大いに期待しています。

グローバル化した世界で 活躍できる人材を「地方都市」長崎から

グローバル化が進展する今日、“地方”的意味は大変重要なものになってきています。“地方”がいかに世界に貢献していくか、その真価が問われているのです。“グローバル”と“地方”は一見対極にあるように思えますが、実は“地方”こそ“グローバル”に直結しています。

その理由の一つは、グローバル化によって発生した貧困問題やエネルギー問題など数多くの地球規模の課題はまさに“地方”に偏在しており、“地方”にグローバル化の矛盾が集中しているのです。裏を返せば、“地方”的課題を解決することがグローバル化による問題を解決することに直結しているのです。グローバルな視点をもって“地方”的課題に対峙していく。そしてそれを世界に発信して地球規模の問題解決に貢献していく。このプロセスがいま“地方”に必要とされているのです。

こうした観点から「長崎」という一地方における地球規模の問題を考えた際、その最大の課題が「核兵器の問題」です。原子爆弾が投下された“地方”都市は世界中に広島・長崎を除いて他にありません。地球規模の問題である「核兵器の問題」。ここ長崎は、世界に核軍縮を訴え、そして世界を牽引していくその重要な役割を担っているのです。

学生時代の行動が その後の自分をつくる

現在世界には15,350発の核弾頭が存在しています。この膨大な数は世界から核兵器が簡単にはなくならないことを示しています。今日、「核兵器のない世界をめざして」いく上で重要視されているのは、“次世代で核兵器廃絶を実現するためのアクション”です。つまり核兵器を世界からなくすその役目は若者の世代に託されているのです。若い世代が「核兵器の問題」にどう向き合うのか、さらには、核兵器の問題において世界を牽引する地方都市「長崎」の「若者」が、いかに考え、行動を起こすことができるかが問われているのです。

ユースは、世界を牽引する“長崎”的夢をかけて創立されました。より多くの若者がこの意志を受け継ぎ、今後さらに核なき世界の実現に貢献してくれることを期待しています。



長崎大学長 片峰茂

(記事作成：白波宏野)

特集

ナガサキから 世界を見つめる



被爆地「ナガサキ」という視点から、世界の動きを見つめる。
そして世界から、被爆地「ナガサキ」を見つめる。

ナガサキ・ユース代表団では、様々な視点から、ナガサキのことや核兵器の問題について考えます。

そこには、長崎にいるだけでも、海外に行くだけでも、なかなか気づくことができない、多くの発見があります。

今年2016年は5年に1度の、集大成の年。

「ナガサキから世界を見つめて」感じた問題意識を基に、自分たちでゼロから企画をつくりあげました。彼らはどういう想いからどんな活動をし、どんなことに苦労してどんな工夫でそれを乗り越えたのでしょうか。そこには、新しい活動へのヒントがたくさん詰まっているはずです。

ナガサキ・ユース代表団活動の記録
CAPSULE
2016年10月
編集にあたって

CAPSULEという冊子の名前は、「アイデアの詰まった箱」をイメージして付けました。新しいアイデアは急に生まれるものではなく、別のアイデアを組み合わせたり一部を変えたりして生まれるものだと私は思っています。みんなのアイデアや想いを詰めたこの冊子CAPSULEが、これからユースに挑戦してみよう、というみなさんの(選考や活動の)ヒントとなれば幸いです。

実はこの冊子をつくるにあたって、一つ野望がありました。5年後、10年後、vol.2, 3,…とこの冊子が増えて、「タイムカプセル」のような、将来のユースメンバーが過去の活動を振り返ることができる「若者の平和活動アイデア集」になれば、と。私一人では叶わない夢です。5年後、バトンを受け取ってくれる「誰か」がいますように…。

(中原ゆかり)

CONTENTS

(1) WHO ARE WE?

- 04 ナガサキ・ユース代表団とは？
- 06 1~4期生の活動ダイジェスト

(2) PROJECTS

- 4期生のプロジェクト紹介—5年に1度の集大成の年
- 08 team PEACE CARAVAN
- 12 team NEA

(3) COLUMN

- 16 ぼくらをとりまくセカイ
- 18 ナガサキ・ユース代表団卒業生のいま！
- 22 Tips for Peace 若者の活動 アイデア集
- 26 資料集

WHO ARE WE?

ナガサキ・ユース代表団とは？

ナガサキ・ユース代表団とは？

長崎県、長崎市、長崎大学の3者が構成する「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC)（→P27）が主催する人材育成プロジェクトです。2013年に第1期生の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核や平和の問題を実践的に学び、この分野で活躍する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。

通常は、核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議／準備委員会（→P27）への参加が活動の中心となります。しかし2016年はNPT関連会議等が開催されない5年に1度の年でした。そのため、ユースのこれまでの3年間の集大成として、ユース第4期生は歴代のユースが得てきた経験やネットワークをもとに企画から実行まで全て自分たちで行いました。

誰が応募できるの？

募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤している大学生や院生、および若者です。年齢の目安は18～25歳となっています。高校生時点での応募は出来ません。また国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、ユースの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間が終了した後も何らかの形で「核兵器のない世界」を実現するための活動に関わっていくことを希望する若者が求められます。大学での学部や専攻などは問われませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力が必要です。また活動に求められる知識を得るために勉強会や企画、準備のためのミーティングに原則参加可能であることも求められます。

費用は誰が負担するの？

活動にかかる費用の一部をPCU-NCが活動支援金として拠出します。2013年～16年の場合は、国際会議等への参加にかかる旅費・滞在費として、一人あたり一律20万円が支給されました。不足分が出た場合は個人負担となります。

誰がメンバーを選ぶの？

選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などの書面審査。2次審査は英語による面接です。ユース4期生における2次審査の選考委員は以下の通り。

- ・調 漸 (PCU-NC会長、長崎大学副学長)
- ・片峰 茂 (長崎大学学長)
- ・モンテ・カセム (立命館大学国際平和ミュージアム館長)
- ・鈴木達治郎 (長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)センター長・教授)
- ・稻田俊明 (長崎大学言語教育センター長)

核問題を専門的に勉強していくなくても大丈夫？

大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)（→P27）の教員に加え、国内外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。

メンバーにとってユースとは？



WHO ARE WE?

ユース1期生～4期生の活動ダイジェスト

2013

NPT再検討会議第2回準備委員会
スイス・ジュネーブ国連本部



(2013年5月時点)(写真左から)
江島 健一(長崎大学医学部医学科6年)、下田 英奈(長崎大学教育学部4年)、
橋口 優乃(長崎大学経済学部2年)、前川陽香(長崎大学経済学部3年)、
胡 労欣(長崎大学経済学研究学科・中国山東大学大学院から長崎大学大学院への交換留学生)、齊藤 佑布子(長崎大学事務補佐員)、太田 祐一朗(長崎大学経済学部3年)、
福田 翔生(長崎大学経済学部2年)



ジュネーブ在住の日本人子女が通う「ジュネーブ日本語補習学校」で平和教育を実践。「もしナガサキと同じ原爆がジュネーブに落とされたらパリからでもきのこ雲が見える」といったICT教材を使った説明に、子どもたちからは驚きの声が上がっていました。

国連内では本会議と並行して、NGO等が主催する様々なイベントも行われます。ユースも、「The Ultimate Wish(究極の願い)」という映画を題材にしたディスカッション中心のワークショップを企画。上映後には参加者同士で感想や考えを共有しました。ドイツの大学生グループも参加し、日独の原発政策についても熱心な議論が交わされました。



ユースの活動 主な流れ (1~3期生までの例)

国際会議に出席する1~3期生の活動の流れをまとめたものです。4期生も、事前準備→現地での活動→報告会という大きな流れは同じですが、勉強する内容や講師などを活動の内容に合わせて自分たちで決めました。



連続講座「ナガサキを学ぶ」(全4回)
平和学習の「出前講座」を行っている「ピースバトン・ナガサキ」のスタッフによる連続講座を受講しました。長崎原爆の実相やその背景を「座学」で学び、「さるく」(長崎弁で「まちをぶらぶら歩く」の意)で原爆と戦争の傷跡を巡りました。



他、講師を迎えた勉強会
この他にも、毎年核兵器の問題の最前線で働く多様な講師をお呼びして勉強会が行われます。過去にはニューヨークの軍縮教育家キャサリン・サリバンさんや日本の外交官、国際NGOのスタッフなどをはじめ、NPT再検討会議の議長、アメリカの若者なども来ています。

連続勉強会「英文テキストで学ぶ核問題」(全9回)

実際に過去の国際会議で使われた政府演説を題材に、核問題の基本概念や専門用語を学び、各国の姿勢について「なぜこの言い回し?」「なんだかエラそう」「わざと曖昧にしているのでは」等々、言葉の背後にある世界の現状を読み解いていました。

出発前の活動 (1~4月)



連続講座「ナガサキを学ぶ」(全4回)
平和学習の「出前講座」を行っている「ピースバトン・ナガサキ」のスタッフによる連続講座を受講しました。長崎原爆の実相やその背景を「座学」で学び、「さるく」(長崎弁で「まちをぶらぶら歩く」の意)で原爆と戦争の傷跡を巡りました。



他、講師を迎えた勉強会
この他にも、毎年核兵器の問題の最前線で働く多様な講師をお呼びして勉強会が行われます。過去にはニューヨークの軍縮教育家キャサリン・サリバンさんや日本の外交官、国際NGOのスタッフなどをはじめ、NPT再検討会議の議長、アメリカの若者なども来ています。

連続勉強会「英文テキストで学ぶ核問題」(全9回)

実際に過去の国際会議で使われた政府演説を題材に、核問題の基本概念や専門用語を学び、各国の姿勢について「なぜこの言い回し?」「なんだかエラそう」「わざと曖昧にしているのでは」等々、言葉の背後にある世界の現状を読み解いていました。

2014

NPT再検討会議 第3回準備委員会
アメリカ・ニューヨーク国連本部



第2期生

(2014年5月時点)(写真左から)

山中 智絵(長崎大学薬学部2年)、橋口 優乃(長崎大学経済学部3年)
新崎 さくら(長崎大学教育学部2年)、宮田 美波(長崎大学医学部保健学科3年)
堀 真理子(長崎大学経済学部4年)、前川 阳香(長崎大学経済学部4年)
田平 由布子(長崎大学経済学部4年)、西田 千紗(長崎大学医学部医学科2年)



日本人学校での
平和授業

ドイツのダルムシュタット工科大学及びハンブルグ大学から参加した約30名の大学生と意見交換を行いました。両大学は毎年、「核兵器禁止条約に関する交渉シミュレーション」プログラムのもと、大学生をNPT会議に派遣しています。「核の傘」と「原発」をテーマに自国の政策についてまとめたプレゼンテーションをしました。日本とドイツは共通項が多く、白熱した議論を繰り広げました。



ドイツ大学生との
意見交換会

2015

NPT再検討会議
アメリカ・ニューヨーク国連本部



第3期生

(2015年5月時点)(写真左から)

天野 貴暢(長崎大学理工学研究科博士前期課程)、秀 総一郎(長崎大学多文化社会学部2年)
西田 千紗(長崎大学医学部医学科3年)、稻垣 歩海(長崎大学多文化社会学部2年)
佐々木 朋哉(長崎大学工学部3年)、河野 早杜(長崎大学環境科学部3年)
荒倉 由佳(長崎大学医学部医学科3年)、中原 ゆかり(長崎大学環境科学部3年)
山中 智絵(長崎大学薬学部3年)、川崎 真由(長崎大学薬学部3年)
宮田 美波(長崎大学医学部保健学科4年)、竹田 謙(長崎大学多文化社会学部2年)



アートで平和を発信
Peace Dove Project

ユース主催のワークショップ。各国から政府関係者、NGO、専門家、若者の出席がありました。「現在の平和教育とその未来」「核問題に対する若者の意識」「日本政府の核政策」の3つのテーマに沿って、事前に長崎大学生を対象に行ったアンケートやインタビュー調査の結果をもとに、現状の分析と今後に向けた提案を行いました。



若者の問題意識を世に問う
国連内ワークショップ開催

2016

5年に1度 総まとめの年
メンバーによる完全自主企画を実行



第4期生

(2016年5月時点)(写真左から)

溝越 史泰(長崎大学教育学部4年)、秀 総一郎(長崎大学多文化社会学部3年)
小泉 容(留学準備年)、稻垣 歩海(長崎大学多文化社会学部3年)
河野 早杜(長崎大学環境科学部4年)、佐々木 朋哉(長崎大学工学部4年)
白波 宏野(長崎大学多文化社会学部2年)、川崎 有希(長崎大学教育学部4年)
工藤 恒緒(長崎県立大学国際情報学部2年)、松本 健太郎(長崎大学教育学部4年)



日本各地で、「核問題」を切り口にしたユースオリジナルの平和教育を実践。

より多様な視点を取り入れようと、事前に中国・韓国の資料館や大学を訪問しました。

→詳細：P 8~11へ

→

詳細



→

詳細

P 12~15へ

現地での活動 (4~5月)



国際会議の舞台へ～外交の最前線を知る～

100カ国以上の政府代表が集まる本会議場の雰囲気は圧巻! 淡々と続く演説の中にも各国それぞれの思惑が混ざり合い、新しい展開や様々なドラマが見え隠れしていました。アメリカとロシアの緊張を含んだやり取りに会場がビリッとする一幕も。ユースメンバーは真剣な表情で会議の動向を傍聴席から見守りました。



帰国後の活動 (6~7月)



長崎大学で報告会を開催し、選考から激動の約半年間の活動について来場者へ報告します。プログラムから準備まで、全てメンバーの手作りです。また、公式の活動期間が終了した後も、依頼を受けて出前授業や講演、スピーチなど「核兵器のない世界」の実現のために自分たちに出来ることをし続けようとするメンバーもいます。

平和教育に新たな一步 日本各地を訪れ授業実践



活動の内容

PEACE CARAVANは、全国の高等学校を対象としたユース代表団オリジナルの平和教育を提案し実践していく取り組みです。核問題を切り口に「社会に関心を持ってもらう」、「自分自身の意見や考えを持つ」の2点を目標として、【原爆被害の実相】【核兵器を巡る国際情勢と日本の立場】【原発と核兵器の関連性】を知り、核兵器のある世界で生きたいか、核兵器をなくすためには何が出来るかについて考える、2時間構成の授業をしました。世界に現存する核兵器の数をクイズやBB弾シミュレーション(→P27)で聴覚体験してもらう工夫をしました。また、知識提示を30分に抑え、大半を質疑応答やディスカッションに充てるなどして、内容理解の確認と受講者の考え方を言葉に表してもらうことを狙いました。



準備期間

- 11月～12月
 - ・4期活動内容立案
 - ・メンバー募集・選考
- 1月～3月
 - ・合同勉強会
 - ・授業の企画、作成
 - ・渡航の準備
 - ・広島研修

中国・韓国訪問(南京・上海・ソウル)

- 4月1日～10日
 - ・資料館3カ所
(南京大虐殺記念館/慰安婦資料館/ソウル平和博物館)
 - ・大学5カ所
(南京大学/上海師範大学/復旦大学/ソウル大学/韓信大学)
 - ・2つの団体(NARPI/PSPD)
を訪問、意見交換など

授業実施(全5府県700人)

- 5月～7月
 - ・授業の企画、作成
 - ※毎度授業のたびに少しずつ変更
 - メンバーカーの母校を中心に5府県
 - 7回 約700人へ授業

活動報告

7月1日
報告会



きっかけ・想い

2015年春、NPT再検討会議。日本政府による「被爆地訪問推奨」の提案が、中国政府の反論であっけなく削除された時、唯一の戦争被爆国である日本の発言力のなさ、中国との歴史的対立の根深さが浮き彫りになりました。このままではいけない、と思い企画したのがPEACE CARAVANです。核兵器の問題を考える「過去」「現在」「未来」という視点を取り入れ、そして「被害面」として語られる被爆の歴史にとどまらず「加害面」の歴史についても考える、そんな平和教育を長崎から全国の学校に発信しよう、そんな想いが原動力となりました。

授業をする上ではまずは自分たちも学ばないと、ということで中国韓国へ足を運び、大学や研究機関、NGOを訪問し歴史認識をはじめとする日中韓間の様々な問題について意見交換をしました。このような問題に前向きに取り組む同世代の若者との出逢いが私達を勇気づけました。



結果・わかったこと

メンバーの母校を中心に、5府県(長崎、広島、大阪、和歌山、愛知)で7回の授業実践が出来ました。アンケートには「わかりやすかった」「おもしろかった」との声が9割、「興味を持った」「さらに知りたい」という声も2～3割に上り、この様な授業の需要を感じました。しかし、アウトプットが多く含む今回の授業は、対象が大人数(200人超)になった時に、全体に目が行き届きにくく生徒たちの疑問やアイデアを共有できなかったため、少人数(最多40人)対象の授業に比べてディスカッションが盛り上がりにくいなどの反省がありました。

今後も授業を改善・継続しながら、さらに年齢や人数、場所、前提知識などの幅広い対象に応じた授業を構想する必要があります。また求められる反面、資金や自分たち自身の講義の関係で現地に赴く難しさもあるので、「ナガサキ・ユース代表団」という枠を超えたシステムを検討することも今後大切だと思いました。

成果

5府県で7回の授業実践ができ、約700人の生徒に授業を届けることが出来た。

課題

学年全体や全校生徒といった大人数に対して効果的な指導案を練る必要がある。

これからの活動へのヒント

- ✓授業実践の継続。
- ✓小・中・大学生や修学旅行生、少人数だけでなく大人数などへも対応できる授業提案。
- ✓「ナガサキ・ユース代表団」という枠を超えて需要に応えていくシステムづくり。

わたしたちの
これまでとこれから



私がPEACE CARAVANチームに参加した理由は、「昨年(2015年)提案した新しい形の平和教育の実践をしたい」と考えたからです。私は昨年ナガサキ・ユース代表団第3期生としても活動しました。そこで、既存の平和教育の課題とそれに対する改善策を国連で提案したのですが、実際に実践する機会がなく活動を終えてしまいました。教育は実践して初めて意味を成すものであり、その「実践」という部分をユースの活動を通して行いたいと考えていました。ちょうどその時、第3期生でも共に活動した稻垣さんが新しい形の平和教育に関する企画を立ち上げたので、このチームに参加しました。

複雑で難しい平和に関する題材を授業として構想するのには時間も非常にかかり、授業にかける1人ひとりの熱意やこだわりもあって、メンバー5人が何度も正面からぶつかり合いました。



しかしその度に相手の意見を真剣に聴き、また自らの意見も主張しながら授業を考え実践してきました。今、活動を終えて振り返った。

てみると、そのように本当に向き合ってきたからこそできる関係を築くことができたと感じています。



また、上記のような「内面的な部分での成長」だけでなく、同時に「視野の広がり」を感じています。一般的に戦争における“被爆地”という特徴を持っているのは、“長崎”と“広島”しかありません。そのため、世界から注目されており、世界の人々と関わる機会に恵まれています。メンバーは世界各国の「核兵器廃絶を目指す仲間」と繋がっており、時には年に数回、海外へ渡航し会議などに参加するチャンスもあります。チャンスは待っていては巡ってきません。自らチャンスを掴むこと、そのために主体的に、そして積極的に行動することの重要性も学ぶことができました。

ユースでの活動を経て、何倍も成長した自分に必ず出会うことができます。自らの目標、そして核兵器廃絶という大きな目標を達成するために、ナガサキ・ユース代表団として共に活動しましょう。

メンバーが、ユース代表団やPEACE CARAVANチームで活動しようと思ったのはどうしてでしょうか。また実際に活動をして、何を感じ、何を学んだのでしょうか。聞いてみました。



私達は、最近の若者の社会への関心の薄まりに注目し、核問題について知ってもらうことと同時に、社会の見方や考え方について気付き、自分自身の考えを持ってもらうことを目的に授業を考えました。具体的な手法として、ディスカッションを多く取り入れる、提示する情報を受講者にとって近しい話題に絞る、質疑応答で関心を探って掘り下げるなど工夫を凝らした授業となりました。

授業を考える過程では何度も壁にぶつかりました。まず、限られた授業時間の中で「私達が伝えたいこと」と「生徒達が理解でき、生徒自身で考えることの出来る量」のバランスを考えながら授業内容を組み立てることの難しさでした。最初の方は、押し付けにならないかと気にするあまり、薄まりすぎて伝えたいことが伝わっていないこともあります。その際には「自分たちは何をしに来たのか」を自問自答し方針を固めました。



学校機関で仕事をされている方々は立場上個人的な意見を言うことが難しいのですが、自分達はそれが可能であるという利点も活かしました。

また、授業後に頂いたアンケートやアドバイスを受けて授業改善を何度も行いました。非常に多様な対象(公私立、部活動、クラス、学年全體、被爆地内外)に合わせてその都度授業を変えていくことは想像以上に大変でした。授業を受けてくれる受講者ことを考



え、その反応を想定しながら試行錯誤し続ける作業をずっと繰り返していた様に記憶しています。これらのことはどんな教育活動を行う上でも重要な視点であったと思います。

これまで私達は自分達の活動する場がすでに用意されている環境にいましたが、今回4期生は初めて自分達でその場を作りだすことを経験しました。この経験を経て気付けたことは、「ゼロから物事を起こすこと」がいかに難しいかということ、今までの「周りのサポートの有り難さ」です。“『人』は支え合って成り立っている”ということの本当の意味をこの活動は私に理解させてくれました。しかし、裏を返せば、私も誰かの支えになれるということです。支えられるだけでなく、誰かの支えとなれるよう今後も様々な経験を積み、立派な『人』になりたいです。

核兵器の問題を学ぶ アジアの学生ネットワークを 自分たちの足で



活動の内容

NEA-NWFZ チーム（以後 NEA）は核兵器廃絶の構想のひとつとして知られる北東アジア非核兵器地帯（NEA-NWFZ）（→P27）を有効に発展させるために“若者”に何が出来るかの探究と実践を目指した取り組みです。

アジアにおける「若い世代での関係の構築」、さらに、「若い世代同士の友好関係がもつ影響力・可能性の探究」の2点を主な目標にしたこの取り組みは、モンゴル・中国・韓国の3カ国訪問先で政府関係者やNGO団体の方、そして同世代の若者たちと意見交換や交流を行い、関係構築を実践的に行ってきました。また、各訪問先で若者を対象としたアンケート調査を行い、これからのアジアの若者との関係構築の可能性を探りました。



準備期間

11月～12月

- ・4期生活動内容立案
- ・メンバー募集・選考

1月～3月

- ・合同勉強会
- ・自主勉強会
- ・渡航の準備
- ・広島研修

モンゴル・中国・韓国訪問

3月25日～4月10日

- ・資料館2カ所（ウランバートル資料館／平和博物館）
- ・大学7カ所（モンゴル国立大学／中国人民大学／中国外交学院／山東大学／復旦大学／上海師範大学／韓信大学）
- ・8団体（Student Round Table / NGO Blue Banner / CANGO / NARPI / PSPD / 緑の党 / 中国外交部軍縮課 / IPPNW）

を訪問、意見交換など

活動報告

5月

- アンケート集計
- 7月1日 報告会



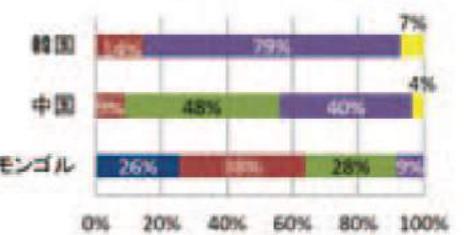
きっかけ・想い

核問題を考える際、現在のアジア情勢は最も改善されなければならない課題の一つです。2015年のNPT再検討会議でそれがさらに明白になりました。日中韓における様々な対立の中、アジアの核情勢が悪化し続けている状況を実際に目の当たりにし、“私たち若者にも何かできるはずだ”そう思い発足したのがNEAです。

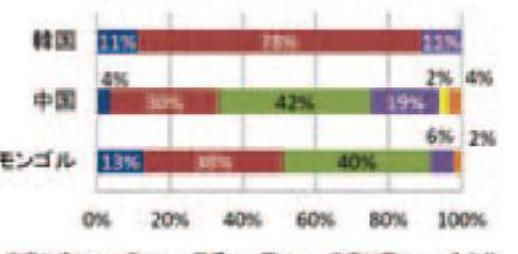
アジア情勢を良くしていくためには、市民レベルでの関係構築が重要だと考えます。市民同士が互いに理解し合えていれば、例え国家間の情勢が悪化してもその認識が歯止めとなり、関係悪化にブレーキをかけることにつながると考えます。そして、この市民レベルの関係を構築する上で大きな役割を果たせるのが“若い世代”だと思います。近年のPOPカルチャーの流行やSNSの発達によって、お互いの距離が非常に近くなり、それに伴い相互理解も進んでいます。その様な関係性を「少しずつ」でも「確実に」築くことのできる取り組みを「継続的に」行っていくことがこれから大切なことだと思います。

アンケート調査結果（3カ国151名回答）

日本と自国政府との関係



日本と自国民との関係



結果・わかったこと

モンゴル、中国、韓国の3カ国を訪問しました。モンゴルは自国を「非核地帯」と宣言しており、アジアの核情勢においては先駆的な取り組みをしています。その取り組みを第一線で牽引したNGO団体と会談し、日本そしてアジアのこれから核問題について意見を頂きました。中国・韓国ではNGO団体や学生などで同じように市民レベルの関係構築のために活動している方々と交流し、これからの日中韓のプラットホームになるような基盤作りや、アンケート調査による各国の意識調査を行いました。この調査からは3カ国のいずれも「国家間の関係は悪いが市民同士では関係は良好である」と認識する若者が最も多く、これらの活動にとって幸運の良い結果となりました。これらの実践と探求の結果を今後の取り組みに反映し、各国の若者と持続的かつ広範囲に関係を続けていきたいです。

成果

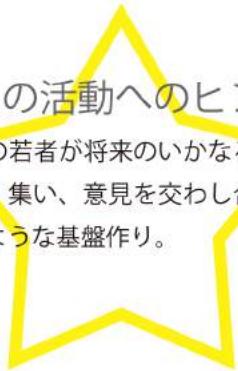
若者同士の関係構築の影響力とその可能性を見出すことが出来た。

課題

継続的かつ広範囲に若者同士の関係を構築していく必要がある。

これからの活動へのヒント

アジアの若者が将来のいかなる時世においても、集い、意見を交わし合うことの出来るような基盤作り。



わ た し た ち の
こ れ ま で と こ れ か ら



昨年ナガサキ・ユース代表団第3期生としてNPT再検討会議に参加しました。会議に参加したこと自体はとても良い経験になったのですが、一方で、参加者として何もできていない自分の「無力さ」を痛感しました。そして、帰国後、ナガサキ・ユース代表団第3期生でも共に活動していた河野と「核兵器廃絶のために自分達も何かできるのではないか、行動を起こさなければならぬのではないか」と考えるようになりました。2人ともアジアに関心があったことから、アジアについて考えるイベント『Asian Youth Assembly』を企画しました。今回の企画NEAはAsian Youth Assemblyに統いて、今度は実際に自分達の足で現地を訪れ学ぶことのできるような企画にしようと考えました。以上がNEAを企画した経緯です。



実際に活動してみて、企画をゼロから立ち上げて最後までやり遂げたり、何かを作りあげたりすることは本当に大変なことだと実感しました。私たちのやりたいことを企画に落

とし込んでいくこと、頭の中で練っている段階の構想を実現できるように計画していくことなど、初めてのことばかりでうまくいかないことも多かったです。一方で、自分がやりたいと思っていたことが形になっていく様子を目の当たりにしながら感じたワクワク感や面白さが原動力となって企画を進めていくことができました。



僕は「自分のプログラムは自分で作り上げる」ことに魅力を感じてナガサキ・ユース代表団に応募しました。そして活動した2期間を通して、「自分がやりたいと思ったことは、行動することで必ず実現出来る」ということを体感することができました。自分がやりたいことや目標に向けて挑戦し、失敗も恐れず教訓としながら進んでいこうと前向きに捉えられる自分に変わることができたと思います。

ユース代表団はメンバー全員が目的を持って参加しているので、それぞれのストーリーがあります。ぜひナガサキ・ユース代表団を通して、楽しみながら、自分のやりたいことを見つけたり、それを実現できるような力をつけてください！

メンバーが、ユース代表団やNEAチームで活動しようと思ったのはどうしてでしょうか。また実際に活動して、何を感じ、何を学んだのでしょうか。聞いてみました。



私は、核兵器廃絶に向けた一つの手段である、“非核兵器地帯構想”に興味を持ち、その実現可能性をモンゴル、そして日中韓の学生らと若者ならではの目線から模索したいと考え、NEAチームに参加しました。実際に活動する中で、非核兵器地帯に対する認知度の低さや国家間に今も存在する歴史認識問題に加え、自らの知識や語学力不足もあり、活動や勉強をすればするほど、核兵器廃絶や非核兵器地帯構想に対して現実的に捉えることが出来ない自分がいました。そして、学生の私たちに出来ること、学生の私たちだからこそ出来ることを自問自答し続けました。そんな時、いつも私を励ましてくれた言葉があります。それは海外渡航前の表敬訪問で田上市長が仰って下さった言葉です。

「一步前にいるものだけが二歩目を見ることがある。」

活動を終えて、今回NEAチームが目に見える形として何かを残すということは正直なところ出来ませんでした。しかし、渡航先で実施したアンケートや多くの人々との対話を通して、特に各国の若者同士で「現在の“草の根活動”によって市民レベルの力が強化されるのでは」という共通認識が得られました。



column1 ぼくらをとりまくセカイ

こうありたいという理想と、そうではない現実。私たちが生きる社会には多くの矛盾がある。

「セカイ」を知ることは、そんな矛盾を知ること。

今核兵器を巡ってどんな現状や課題があるのだろう。

私たち若い世代にもできることはあるのだろうか。

4期生が「セカイ」の第一線で働く人たちに聞いてきました。

れからの日本の課題です。

こうありたいという理想と、そうではない現実。私たちが生きる社会には多くの矛盾がある。「セカイ」を知ることは、そんな矛盾を知ること。今核兵器を巡ってどんな現状や課題があるのだろう。私たち若い世代にもできることはあるのだろうか。4期生が「セカイ」の第一線で働く人たちに聞いてきました。

白波 普段はどういう活動をされているのですか？

川崎 私が代表を務めるNGO団体「Peace Boat」では様々な分野での活動を行っています。地球一周の船旅でご存知の方が多いかもしれません。街中にポスターが貼ってありますから。核兵器廃絶の活動はそのうちの一つです。そして、核兵器廃絶のための活動だけに限らず、私がPeace Boatで行っている様々な活動においては全て共通して、主にインプットとアウトプットを繰り返します。インプットとは国際会議に参加し、各国政府関係者との意見交換を通して動向をさぐること。そしてアウトプットとは、イベントやメディアを通してインプットした情報を世に広めることを言います。このアウトプットが最も重要なポイントで私が一番チカラを入れていてることでもあります。

白波 普段はどういう活動をされていますか？

川崎 これまで歴史をつくってきた様々なムーブメントはどうやって起こってきたか、考えてみて下さい。そこでは常に初めて声をあげる「誰か」がいます。その声が周りの多くの人の心を揺さぶり、社会を動かしてきました。世の中は常に少数者が多数の人を動かすことで成り立っています。この「誰か」になつて社会を変えるのは自分

白波 では今の日本の現状を踏まえ、これから日本の日本の課題は何ですか？

川崎 残念ながら、日本に近い国ほど核兵器廃絶のメッセージは伝わりづらい、という現状があります。なぜなら、太平洋戦争中に日本に占領されていた国には、原爆投下によって日本軍の占領下から解放されたという意識や、日本軍の加害面の問題があるためです。私たちが核兵器や平和に関する活動を行う際には、まずこのことを意識しておかなければなりません。その上で、広島・長崎で起こったことを事実として次世代に伝え、平和の想いを世界に発信する必要があるのです。しかし、アジアにおいては、七〇年経った今でも、このメッセージが伝わりづらく、広島・長崎が未だ平和のシンボルとして受け入れられないのです。これがアジアにおいて核兵器廃絶の道を閉ざす大きな壁になっています。これをどう打破するか、これがこれから日本の課題です。

白波 最後に若い世代の方にメッセージをお願いします。

川崎 これまで歴史をつくってきた様々なムーブメントはどうやって起こってきたか、考えてみて下さい。そこでは常に初めて声をあげる「誰か」がいます。その声が周りの多くの人の心を揺さぶり、社会を動かしてきました。世の中は常に少数者が多数の人を動かすことで成り立っています。この「誰か」になつて社会を変えるのは自分

ミライを変える "誰か"になる！

NGO団体 Peace Boat で 10 年以上活動し、核問題の最前線に立って世界で活躍されている川崎哲さん。ユースの勉強会では、核兵器を巡る最新の動向や、今後の予測について、長年の経験や膨大な情報網による鋭い視点から、毎度熱くしかし冷静に語ってくださいます。長く核兵器廃絶に取り組み続けるワケとは？ どういう活動をしているの？ などなど、核兵器廃絶に向けた活動の目的や内容や、いまの世界や日本の動き、そして若い世代へのメッセージなど、たくさんの気になる質問をぶつけてみました！

白波 普段はどういう活動をされているのですか？

なくなつたところで完全に平和な世の中にはならないでしょう。なぜなら核兵器の問題は世界中に無数にある、解決しなければならない問題の一つに過ぎませんし、平和のために解決すべき問題は次から次に出てくるからです。しかし核兵器を廃絶することを一つの大きな目標として、「核兵器禁止条約」を制定し、国際ルールで核兵器の使用を「禁止」すること。それは世界が良い方向へ向かう重要な一步であることに違いありません。ゴールはないですが、ゴールに近づこうと努力することに意味があるのです。その小さな、しかし重要な一步を踏み出すこと、それが私が活動をする目的です。



白波 川崎さんにとって、もういった活動をする上で、どのような活動をする上で、目的や目標は何ですか？

川崎 平和のための活動にゴー ルはありません。仮に核兵器が

白波 「核兵器禁止条約の制定が重要な一步だ」と仰いましたが、今その一步を妨げているものってなんなのでしょう？

川崎 それはやはり、「無関心」です。実は以前までは、国際情勢が原因で難航しているという考え方でしたが、最近になってその認識が変わりました。問題は

白波 それは日本でも同じことが言えますか？

川崎 日本でその傾向はむしろ強いつもりであります。若者に関して言えば、ヨーロッパでは多くの若者が精力的に活動しているのがよく目に留まります。世界に目を向けると若者のパワーには目を見張るところがありますね。そういう意味で日本の若者は非常に多くいる現状です。

川崎 哲さん
AKIRA KAWASAKI

NGOピースボート共同代表。核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員。「Abolition2000」調整委員。2008年から広島・長崎の被爆者と世界を回る「ヒバクシャ地球一周証言の航海」プロジェクトを実施。恵泉女子大学非常勤講師、立教大学兼任講師。著書に『核兵器を禁止する』(岩波ブックレット2014)『核拡散』(岩波新書 2003)など。

私が聞いてきました！
白波 宏野
ユース代表団第4期生(NEAチーム)/
長崎大学多文化社会学部2年



column2 ナガサキ・ユース代表団卒業生のいま！

ナガサキ・ユース代表団ができて今年で4年。年ごと、メンバーごとに活動の内容は少しずつちがう。

これまでにどんなメンバーがいて、
どのような経験をし、
いま、なにをしているのだろう？

4期生が会いに行きました。

子をテレビで見たことでした「私は将来結婚しても子どもを産むことは出来ないかも知れない」。衝撃を受けました。そして被爆者のおばあさんが話してくれた七〇年前の被爆者に向けられた差別を思って、出ました。七〇年前と何も

河野 西田さんは医学を学んでいらっしゃいますが、ユースとはどのようなつながりがあるのでしょうか？

れば何の肩書きもない大業も伝わるんだな。諦めだ早い」と私もできることさんあると実感しました。



FILE1
西田 千紗さん
CHISA NISHIDA

ユース代表団第2期生・3期生 / 長崎大学
医学部医学科在学中 / 平和宣言文起草
委員に中止・最年少で選任される

写真：スピーチの後に
ロマン・モレイ議長から
声をかけられた西田さん



世界を変えるチカラ
いま、ここに

いま、ここに

今回取材をした西田千紗さんは、二期生、三期生をつとめました。私は（河野）も実は第三期生の時に西田さんと共に活動をしていましたが、印象に残っているのは何事にも真摯に取り組む姿や、なんといっても、人を魅了する完璧な「スピーチ」。今回はそんな才色兼備な彼女に、ユース代表団の経験を通して何を学び、何を得たのか聞いてきました！

河野 コース代表団に応募したキッカケはありますか？

西田 私の出身地は広島県で、平和教育を受けたり、原爆資料館を訪ねたりする機会が多くあります。た。中学校から高校の約3年間、ジュニアライター（→P27）として活動していましたこともあって。大學でもそういう活動を続けたいと思って、長崎大学に入学することに決めました。

大学では医学を専攻しましたが、思った以上に忙しく、このま

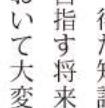
ま学業に専念しようと思つていました。そんな時、たまたま「ナガサキ・ユース代表団第二期生募集」のポスターを学校で目にしました。どうしようか迷いましたが、小さいころからよくしてくれた被爆者のおばあちゃんが私に話してくれた「一度と私たちと同じような戦争や原爆の体験を繰り返してほしくない。そうならないような世界に千紗ちゃんが変えてね。約束だよ。」という言葉を思い出して、「今やらないでいつやる！」と留年を覚悟で（笑）応募したのがキッ

カケです。「私の大好きなおじいちゃんおばあちゃんに辛い思いをさせた原爆なんて絶対あつちやいけん！」と小さいころ思つたのがずっと残つてたんですね。

世界を動かすためには「一核兵器」をなくしていく必要がある」という根拠を十分に理解し、誰もが納得できるように説明することがとても大切だと感じました。

西田 さい

河野 西田さんはユース代
驗、得た知識は目指す将来において大変役立つだろうと思
います。

A group of five people are standing together in an indoor setting. From left to right: a woman with dark hair in a black blazer; a man with glasses and a yellow tie; a man in a dark suit and tie; a woman with short dark hair in a grey top; and a man with glasses and a blue shirt. They are all smiling at the camera.

た。知っていることが当たり前の世代、知らないことが当たり前の世代。お互い正反対の“当たり前”を照らし合わせて理解していくことはすごく大変でしたが、自分の常識を超えて相手を知る、相手に伝えることはとても大切なことだし、非常によい経験になりました。

そんなメンバーと共に活動をすることができます。本当によかったですと心から思っています。ナガサキ・ユース代表団として集まれたこと、そしていろいろ学んだ経験はこれから私の人生の中で絶対に活きてくることだと思っています。私にとってユース代表団とは「世界が広がるチャンス」です。ぜひ皆さんも、ナガサキ・ユース代表団として「世界を広げ、自分自身を成長させてみませんか?」

が現れか変わる様子もなく「大学生にできることがあるのか?」と悲観的に考えていた中でのスピーチでした。

スピーチでは自分の想いを言葉に込め、会場からは多くの「感動した」という言葉をいただきました。そのなかでも、当時ニュージーランドの大便を務めていた方から「この活動や想いを絶対に止めないでくれ。君の言葉には力があるから。」と熱いお言葉をもらいました。「ちゃんと想いをもつていれば何の肩書きもない大学生の言葉も伝わるんだな。諦めるのはまだ早い」と私もできることができたさんあると実感しました。

変わっていない”このことがきっかけで、目に見えない、きちんと究明されていない放射線の人体への影響について医学的にしっかりと学び、患者さんにわかりやすく伝えたいと思うようになりました。また、核の恐ろしさについて、医学的知識を活かして具体的に分かりやすく人々に知らせていきたいとも思っています。

和被念式典で長崎市長が説む「平和宣言文」は、この起草委員会で作成されています。昨年は、長崎市長の「若者の意見を取り込みたい」との意見により、私がその役目を依頼されて務めることとなりました。そのためこの委員会には、「若者としての声」を意識して取り組んでいきました。委員会を構成する他の委員さんの中には被爆者団体の代表の方や、大学の平和や核兵器の分野で長年教鞭をとられていた方々もいらっしゃいました。そういう方々にとって戦争や核兵器は非常に生々しいものですが、これらが常に身近な問題となつてしまっています。一方で若者はそもそも関心がわかない人が多いに戦争や核兵器の問題を自分事

西田 ユース代表団の活動を振り返ってみると、とても充実していたように思います。私は医学部の学生ですが、ユース代表団のメンバーは学部もバラバラですし、出身地も違いますし、それこそバツクグラウンドも異なります。そのメンバーと共に、「核兵器」について議論を交わし、企画を作り、発表をしたりするわけなので、当然ぶつかり合うことはあります。しかし、お互いになぜそう思っているのかを理解し、意見を深めていくことで自分にはなかつた「新たな視点」を発見できたり、物事を広く足えることが出来るよ

私生をつとめました。私
動をしていましたが、
姿や、なんといつても、
才色兼備な彼女に、ユー
々聞いてきました！

核兵器の現状を「国際関係」や「科学的根拠」に基づく見解などから
多角的に学び、高校とはまた違つ
た「論理的視点」の必要性を感じ
ました。

私が聞いてきました！
河野 早杜
ユース代表団第3期生4期生
(NEA チーム) /
長崎大学環境科学部4年



ユース代表団 卒業生のいま！

一味違う大学生活に

二〇一三年春、ナガサキ・ユース代表団第一期生として選出された福田杏奈さん（当時は長崎大学教育学部四年生）。現在は夢を見事に叶え、長崎県立大村高等学校の教師として日々教壇に立ち、生徒たちの成長を見守つておられます。そんな福田さんにとつてユース代表団とはどんな場であり、どんな存在だったのでしょうか？



私が聞いてきました！
川崎有希
ユース代表団第4期生
(PEACE CARAVANチーム)/
長崎大学教育学部4年

川崎 ユース代表団に応募したきっかけを教えてください。
福田 大学生として平和教育について勉強したかったのと、勉強した証として何か一つ形に残したいと思ったのが大きなかつかけです。本や論文を読んだり実践することは長崎でも出来るけど、今リアルタイムで起こっていることについてはなかなか実感が湧かないかつたり理解出来なかつたりしたので、実際に会議が行われている現地へ行つてみたらわかることが多いかな。それが大きな理由かな。



川崎 えのは絶対易しいですよね。たくさん悩まれたと思うのですが、授業目標は結局どのようなものに設定されたんですか？
福田 「長崎の原爆に関する理解を深めること」と、「子どもたちが自分自身のことや身近なものに置き換え、考えを深めて広げる」との二点にしました。そうすることで、原爆投下という過去の出来事から自分たちの未来を考え大切なことを狙いとしました。子どもたちにとって一番好きな物や大切にしているものを書いてもらいました。

川崎 なるほど、わかりやすいです。授業をした中で印象に残つたことがありますか？
福田 目がすごく真剣でした。真摯に聞いてくれる姿は授業者として本当にやりがいを感じることができて嬉しいですよね。では反対に、活動の中で一番変ったことはどんなことでし

川崎 真剣に聞いてくれる姿は授業者として本当にやりがいを感じることができます。これまでにどんなメンバーがいて、どのような経験をし、いま、なにをしているのだろう？
4期生が会いに行きました。

川崎 なるほど、平和教育や現地での学びが力がいったんですね。ところで、福田さんは長崎ではなく、山口県出身だったと思うのですが、平和教育や現地へ行つてみたらわかることが多いかな。それが大きな理由かな。

川崎 実は小学生のころ広島の原爆資料館を訪れ学ぶ機会もあったのですが、自分の生まれ育つた所に帰ると普通の日常に戻つてしまふんですね。八月六日も九日も黙祷することもなく、『当たり前の一日』として過ごしていました。祖父も学徒動員の体験談を毎日のように話してくれていたので、そのような日を『当たり前の一日』として過ごすということに高校生の時からなんとなく違和感というか、もやもやした気持ちを感じていて。大学生活を長崎で過ごすことになり、何をするか考えたときに、せっかく長崎に来たからといって過ごすということに高校生の時からなんとなく違和感というか、もやもやした気持ちを感じていて。大学生活を長崎で過ごすことになり、何をするか考えたときに、せっかく長崎に来たからとい

FILE2
福田 杏奈さん
ANNA FUKUDA
ユース代表団第1期生 / 長崎大学
教育学部を卒業 / 現在は長崎県立大村
高等学校教諭



川崎 私も教育実習で授業したり平和教育の授業を考えたりしたことがあるのでわかります。やるべきことが決まつて方授業を考えています。

川崎 うことで、もやもやした気持ちを持たれたきっかけは何だったのでしょうか？
福田 実は小学生のころ広島の原爆資料館を訪れ学ぶ機会もあったのですが、自分の生まれ育つた所に帰ると普通の日常に戻つてしまふんですね。八月六日も九日も黙祷することもなく、『当たり前の一日』として過ごしていました。祖父も学徒動員の体験談を毎日のように話してくれていたので、そのような日を『当たり前の一日』として過ごすということに高校生の時からなんとなく違和感というか、もやもやした気持ちを感じていて。大学生活を長崎で過ごすことになり、何をするか考えたときに、せっかく長崎に来たからとい

川崎 チームとしていかにしてまとまるか、ということについてはすごく悩みました。一人ひとりやりたいことも違つていて、一人ひとり信念もあって。同じところからスタートしても、目指す場所が一つじゃないんですね。まとまるまで何度も話し合いを重ねたので、すごく時間がかかりました。自分で自分の学部の勉強やアルバイトなど、一人ひとりの生活もある中で、あれだけのスケジュールをこなし、あれだけのものを生み出していく過程には、投資する時間も体力もすごく必要でした。また、個人だけではなく協力してやつていくということもかなりエネルギーが必要だったなと思います。

川崎 めっちゃやわかります。笑福田さんの中継を見てみんなで黙祷するという平和集会を行つたんですね。普段なかなかゆっくり話す時間が取れないぶん、今年の式典の中継ではちょうどRECNAが映つたこともあり、「実際に私もスイスにあるこの国連欧州本部まで行つて、核兵器に関する会議を傍聴したことがあるんだ」などの話をしました。生徒は「えー！」と言ひながら聞いてくれました。また、今年は学級通信に私自身の想いや生徒達に考えてほしいことを書いていたのですがこちらも真剣に読んでくれました。去年も少し話をしていただきました。去年も少

Tips for Peace

若者の活動 アイデア集

ここで紹介するのは、場所も、きっかけも、やり方も違う、多様な企画や活動。共通点は「若者が主催」の、「71年前の戦争に関する」ものということ。ユースメンバーのアンテナに引っかかったものを中心を集めました。それは参加する方も、企画する方も、わくわくする企画や活動。今までにない発見があった、新しい仲間ができた、自分にも世界が変えられるかもしれない…。彼らの活動の中には、そんな風に感じてもらえる、感じることができるような企画をつくる、ヒントが詰まっています。

①活動場所 / 時期 ②運営者数 / 参加数 ③ホームページ ④活動の目的・理念 ⑤活動内容 ⑥みなさんへのメッセージ

どこでも誰でもできる
平和を考えるきっかけづくり

WHAT'S YOUR PEACE?



①やりたい時にやりたい人がやりたい場所で
②不明
③<https://m.facebook.com/whatisyourpeace/>

④参加する人それぞれだが、私(発起人)は被爆者のおじいちゃんおばあちゃんが笑顔で過ごせる時間を少しでも増やしたいと思い、この活動を始めた。

⑤『あなたにとっての平和は何ですか?』と問いかけ、平和について考えるきっかけを作る。自由に書いてもらったスケッチブックとその人を写真に撮り、集めて展示会を開く。来場者にも同じ問い合わせし、平和について考える輪を広げていく。

⑥世界平和は夢のまた夢だと思います。だからこそ平和のために次の世代にどういったバトンを繋ぐのか。見て見ぬ振りの姿勢か、不可能にチャレンジする姿勢か。選ぶのはあなたです。



知ることから始めよう
広島平和公園ボランティアガイド

村上 正晃



- ①毎日 / 広島平和記念公園
- ②1人 / 1人～大勢 ※ボランティアガイドグループFIGのメンバーの一員として活動しているが、今回は個人を紹介
- ③・ブログ『23歳が原爆を伝えるガイド日記』
- ・ハフィントンポスト『オバマ大統領が去った広島で23歳のボランティアガイドが思うこと。』

④ガイドのモットーは『事実を正確に分かりやすく心に響くように』。胎内被爆者の三登浩成氏の指導の元、現在までにガイドした人数は80カ国15000人を超える。

⑤大学卒業後、現在夜はアルバイトをしながら昼は毎日、原爆ドームの横で平和公園を訪れる観光客に向けて被爆の実相を伝えるガイドを行っている。

⑥戦争を経験していない自分達だからこそ伝えられることもあると思います。一人ひとりが少しずつ出来ることをやっていきましょう。



思い描く
アジアの未来へ一歩踏み出す

Asian Youth Assembly



①通年 / 北東アジアを中心に活動
②日本メンバー 10名韓国メンバー 5名 / 約60名
③<https://m.facebook.com/peacestoryjpn/>
④将来のアジアについて若者が議論し、交流することで「私たちが思い描く未来のアジア」を共に考えていいくこと

⑤2015年12月、九州の若者(留学生を含む)を中心におこなわれた「未来のアジア」についてアジアの若者たちと共に学び、理解することをテーマとして開催。アジアの抱える問題や活動を通してワークショップを行い、将来のアジアのビジョンを共有するとともに、アジアの若者同士で交流することもできた。

⑥「未来のアジア」についてアジアの若者たちと共に学び、考え、行動しませんか?アイディアお待ちしています!

「対話」で見つめる、あの日のこと
Lingua Franca(リンガフランカ)主催
はちろくトーク



- ①毎年8月6日の近く、広島市内のカフェで
②運営人数10人／参加人数60人
③ <http://llinguafranca.jimdo.com>

④広島在住の大学生の集まり。"lingua franca" はイタリア語で「共通のことば」という意味。被爆証言をきっかけに若者世代が平和を考える場の共有や、若者の考えと広島の想いとの間に「共通のことば」を見つけ、架け橋になることが目標。

⑤若者でも気軽に足を運べる被爆証言会。お洒落なカフェでイベントを実施し、若者が聴きやすい空間作りに徹する。被爆者との「対話」を軸に、8月6日に思いを寄せる。そして、同世代で感想をシェアし、考えを深める。

⑥「対話」によって生まれる、体温の通った被爆証言が、ここにあります。8月6日は「はちろくトーク」にぜひお越しください。



全国の仲間と平和について考える4日間
全国大学生活協同組合連合会主催
Peace Now! NAGASAKI



- ①通年、8月8～11日が基本／長崎市内
②運営人数 実行委員→毎年10名程度
その他（前日入りし運営裏方など）→毎年13名程度
参加人数 毎年50名程度（今年は約30名）
③ <http://www.univcoop.or.jp/about/international/peacenow2016pre.html>

④社会問題について考える必要性を感じながらも、複雑さから実際に考えることが出来ていないという大学生の現状に対し、平和などに興味関心を持ち、自分で考え行動していくようなきっかけを提供する。

⑤全国から集った大学生が、長崎のまちを歩いて感じ、太平洋戦争や現在の諸問題を知り、これからの未来を考え、様々な声や想いを聴き語り合う、そんな4日間。2016年のテーマは『あの時、あの場所にいたら僕は何を考えるんだろう』。

⑥様々な価値観を持った仲間と『平和』というテーマで深く交流出来ることがこの企画の最大の魅力です。



戦争（沖縄戦）の記憶を
ジブンゴトに
(株)がちゅん



- ①年中／沖縄県
②運営人数8名／参加人数約1.5万人
③ <http://gachiyun.wixsite.com/gachiyun-inc>

④同世代同士でゆんたく（沖縄の方言でお喋りの意）する機会を作り続け、沖縄戦や平和をジブンゴトにしてもらいたい。

⑤全国から沖縄に来る修学旅行生向けに、地元の大学生とのディスカッションによる平和学習プログラムを提供している。

⑥沖縄で、平和について一緒にゆんたくしましょう！



この世代、この場所でしかできないことを
RECNA サポーター主催
ながさキブン 2016



- ①2016年8月8日～10日（3日間）
長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）
②運営人数4人／参加人数30人
③なし

④71年前、長崎に原子爆弾が投下された8月9日に、日ごろあまり考えるきっかけのない核兵器の問題に向き合う。そして“若い世代”を中心に被爆遺構を巡ったり被爆証言を聞いたりして感じたことや考えたことを若者同士で話し合い、共に“ミライ”について考える。

⑤被爆遺構巡り、被爆証言、講演会などによるインプットに加え、インプットした内容を踏まえたディスカッションやプレゼンテーションなどによるアウトプットを行った。

⑥これからのミライにおいて“長崎”的“若者”的可能性は無限大です。この場所で私達にしか出来ないことを！



メディア掲載多數

用語解説

企画

ナガサキ・ユース代表団第4期生

編集

川崎有希 ユース第4期生 / 長崎大学教育学部4年

白波宏野 ユース第4期生 / 長崎大学多文化社会学部2年

中原ゆかり ユース第3期生 / 長崎大学環境科学部4年

執筆

ナガサキ・ユース代表団第4期生

デザイン

中原ゆかり ユース第3期生 長崎大学環境科学部4年

発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14

(長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 内)

TEL : 095-819-2252 / FAX : 095-819-2165

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/pku/>

核兵器廃絶

長崎連絡協議会

PCU-Nagasaki Council

2013年4月5日 長崎新聞(12面)

核兵器廃絶 思い伝えて
長崎連絡協 メンバーに任命状
スイスに派遣「ナガサキ・ユース代表団」

2015年5月9日 長崎新聞(27面)

核めぐる状況 教えるべき
ナガサキ・ユース代表団
平和教育世界に問う
NYで集い若者ら参加

2015年05月09日 長崎新聞 27面

2014年4月30日 長崎新聞(20面)

ユース・代表団 始動
各国政府関係者と交流 ニューヨーク
「核の時代 学び、伝える責任」

2014年5月12日 長崎新聞(1面)

今、世界を変えるとき
ナガサキ・ユース代表団NY活動記(1)

非核へ 突破口探せ
市民参加の意義実感

2016年3月19日
長崎新聞(28面)

「未来に向けた活動を」
ナガサキ・ユース代表団
非核研究 平和教育
4期生が意気込み

2016年03月19日 長崎新聞 28面

2016年5月27日 長崎新聞(26面)

オバマ氏 きょう広島訪問
「核廃絶の先頭に」
長崎から参加 市長、若者
所感に期待

2016年7月2日 長崎新聞特集号(4面)

たくさんの人と話そう
核兵器なくすために
ナガサキ・ユース代表団4期生 松本 健太郎さん
=長崎大学教育学部4年=

2014年04月30日 長崎新聞 20面

2014年05月12日 長崎新聞 1面

2016年05月27日 長崎新聞 26面

2016年07月02日 長崎新聞特集号 4面

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

2012年10月発足した長崎県、長崎市、長崎大学の三者による核兵器廃絶への道を切り拓くための長崎連絡協議会。¹⁾

NPT再検討会議(準備委員会)

「核不拡散条約(NPT)」は、核兵器保有国が増えることを防ぐために作られた条約。1970年発効。加盟国は191か国(2003年に脱退表明した北朝鮮を含む)で、インド、パキスタン、イスラエルの3か国は加盟を拒否している。

NPTでは、米・ロ・英・仏・中の5カ国を「核兵器保有国」、それ以外を「非核兵器保有国」と定め、前者には核軍縮に向けた交渉を誠実に行なうことを求め、後者には核兵器の開発や取得を禁じている。また、条約加盟国には「原子力の平和利用」(原子力発電など)の権利が認められている。

条約で定められた義務がきちんと守られているかを検討するために、5年ごとに開かれる会議が「再検討会議」。再検討会議の間には3回の「準備委員会」が行われる。次は2020年再検討会議に向かって、2017年から3回の準備委員会が開かれる。²⁾

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)

2012年4月、長崎大学で発足。「核なき世界の実現」に向けた日本で初めてのアカデミアの共同教育研究施設。国際的な核軍縮の動向について調査研究や政策提言を行う。また、核問題に取り組み、グローバルな社会に通用する人材の育成にも取り組む。³⁾

BB弾シミュレーション

世界にある核兵器の数を、同数のBB弾を缶の入れ物に落としていくことで表現する方法。数字ではピンと来ない核兵器の数を感覚的に理解することができる。全て落とすのに1分半程度かかる。なお、このシミュレーションにおいて、BB弾1発ごとの威力は同等のものとなっている。シミュレーション後、繰り返される核実験によって核兵器の威力は年々強まっていることを補足説明した。

北東アジア非核兵器地帯(NEA-NWFZ)

条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」という。この条約によって核戦争の危機を減らし、国際的な緊張をやわらげることにもつながる。

地球の南半球は、1967年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約によって、すでに陸地のほとんどが非核化されている。

用語解説

北半球でも、1998年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009年には中央アジア非核兵器地帯条約が発効されている。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするもの。地帯として完成するためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国(アメリカ、ロシア、中国)が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になる。⁴⁾

ジュニアライター

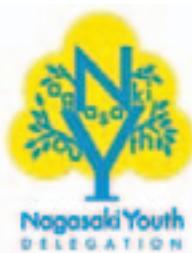
広島に住む中学2年生から高校3年生が、平和活動しているグループを紹介する「ジュニアライター通信」を毎月曜日(休刊日の場合は火曜日)の中国新聞「平和のページ」に連載しているのをはじめ、ヒロシマの原爆に遭った被爆者の方に体験を聞いたり、「平和」に関わるさまざまなテーマを取材して夕刊に掲載したりしている。その他、平和に関する幅広い活動をしている。⁵⁾

長崎平和宣言

8月9日の長崎原爆の日、平和祈念式典で長崎市長が世界に向けて読み上げるメッセージ。1948年に始まった。74年に有識者らの「平和宣言文起草委員会」が発足。宣言は毎年、委員会での議論を経て練り上げられてきた。80年からは市長を委員長に学識経験者や平和運動の代表、被爆者らが参加する現在の形になった。市長が学者らの意見を聞いて個人的に書き上げる「広島方式」と異なり、学者や被爆者ら市民と公開の議論でつくりあげる「長崎方式」は、「市民がつくる平和宣言」といえる。⁶⁾

参考文献

- HP「PCU-NCとは」(2016.9.20)
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/pku/>
- ナガサキ・ユース代表団2015活動レポート
- HP「RECNAとは」(2016.9.20)
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/about>
- 長崎市HP「平和宣言文-用語解説」
(2016.9.21)
<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/appeal/terms.html>
- ジュニアライターfacebookページ
(2016.8.20時点)
- 用語解説コトバンク「長崎平和宣言」
(2011.08.13 朝日新聞 朝刊 長崎 2地方)



核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council